

定年退職

古くは中国の『礼記』から 昔も今も、引き際が肝心

日本で定年制度が誕生したのは明治20年（1887年）、海軍の火薬製造所で職工規程に盛り込まれたのが始めとされている。だが、歴史をさらに遡ってみれば、一定の年齢を境にして職を退く考え方は古く、奈良時代からあった。「致仕」である。

8世紀前半に編纂された養老律令には、「凡そ官人年七十以上にして、致仕聴す」とある。70歳で定年とは驚きだ。日本人の平均寿命が男女共に50歳を超えたのは、昭和22年のことである。当時の官僚のうち、70歳まで勤め上げることのできた人間が果たしてどれほどいたのだろうか。

その正確なところはわからないが、発掘された木簡などから、わずかにうかがい知ることができる。当時の主要な記録媒体の1つである木簡は、役人たちの勤務評定にも使用され、その名前や年齢、本籍地などが記してあるからだ。後世の学者がそうした木簡124本を基にその年齢構成を調べたところ、最も多かったのは40代の36人で、50代は28人、60代は12人、意外なことに70歳以上が5人もいた。多くは下級官僚のものという限定付きだが、実際には、70歳を超えてなお働き続けた官僚もいたことがわかっている。

「70歳を超えたら職務を返上する」のはそもそも、中国の『礼記』に倣った考え方だ。礼記ではまた、「50歳を超えたら重要な官職政務を扱い、60歳を超えたら多くの人を指揮し、70歳を超えたら地位を人に譲る」のが「礼」だとされる。つまり、年をとって職を退くことはもともと法で強要されるものではなく、高貴な位にある人が、礼をわきまえ自分で判断するものだった。したがって、その気になれば70歳でも80歳でも勤め続けることはできた。老人は今よりずっと少なく、その記憶や知恵、自主性が尊重されていたのだろう。

さて、律令制度の本家本元、中国では、唐の役人で名詩人の白居易が晩年、こんな詩を書いている。

「達哉達哉白楽天 分司東都十三年 七旬纔滿冠已挂 半禄未及車先懸（真理に達した人だなあ、白楽天は、東都洛陽に分司たること十三年であった。七十歳になるやいなや辞職をし、俸給が半減されないうちに隠退したのだ）」

出世とは縁のなかった白居易は71歳で退職し、75歳でこの世を去った。致仕しただけで真理に達したとはオーバーだが、引き際を自分で判断する致仕とは、それほど難しいことだったのかも知れない。



Text = 曲沼美恵

フリーライター。1970年生まれ。福島大学教育学部卒業。日本経済新聞社を経て、現在に至る。著書「ニート—フリーターでもなく失業者でもなく」（玄田有史氏との共著、幻冬舎）

Illustration = 下谷二助

参考文献

『木簡の社会史：天平人の日常生活』（鬼頭清明著、講談社学術文庫）、『日本思想大系新装版 律令』（井上光貞ほか校注、岩波書店）、『新釈漢文大系27 礼記』（竹内照夫著、明治書院）、『漢詩選10 白居易』（田中克己、集英社）